

〔書評〕

Siniša Malešević,

① *Nation-States and Nationalisms*, Polity Press 2013② *The Sociology of War and Violence*,

Cambridge University Press 2010

土居 充夫

ナショナリズムは、様々な形をとって現れる。おいしい食べ物・飲み物、美しい自然、伝統文化を誇ったり、スポーツの国際試合で自国チームを応援したりする。これらはいずれの場合もそれ自体は平和的で、特に問題にはならないだろう。しかし、ナショナリズムが暴力的な形をとる場合は、その影響は大きく、深刻になり得る。そこで、ナショナリズムを暴力的にする要因・メカニズムの研究は極めて重要となる。

書評に取り上げた2冊は、このテーマに正面から取り組んだものである。書名の違いから想像されるように、2冊は重点の置き方が異なっているが、内容はしばしば重複している。そこで本書評では主に①に依拠して、著者の思想を紹介したい。著者のS、マレシエヴィッチは、1969年生まれで、①によれば、University College Dublin（アイルランド）の社会学部教授・学部長とのことである。

従来のナショナリズム研究をここで要約する余裕も能力もないが、ネーションやナショナリズムは近代の産物かどうか、また人工的な創出物であるかどうか、この2点が争点であることは押さえておきたい。そうすると、近代の産物と見なすモダニスト（A.ゲルナーなど）、同じく近代の産物と見なすが、上からの創出に加え下からの受容を強調するソーシャル・コンストラクショニスト（E.ホブズボームなど）、ネーションを歴史的に堅固な文化的個体（ethnie）の近代における現れとみなす、すなわち文化的連続性を強調するエスノシンボリスト（A. D. スミスなど）に先行研究を分類できる。マレシエヴィッチはスミスを踏まえ、さらに乗り越えようとする。つまり、文化的連続性ではなく、組織的連続性、そして間接的にイデオロギー的連続性こそが重要だということである。その近代における到達点が国民国家（nation-state）なのである。以下、2点に分けて著者の主張を紹介する。

1、国民国家は多くの歴史的偶然から成る、組織的、イデオロギー的産物であり、アメリカ革命、フランス革命後に誕生した。ナショナリズムはネーションへの共有された忠誠心

ではなく、国民国家への忠誠心である。[nationalism というより nation-statism という方が正確かもしれない。]

マレシェヴィッチは、M. マンと同じく、人間は、安全、保護、物質的安寧を求めて、社会的組織を発達させてきたとみる。(ちなみに、その代わりに個人の自律を失うという代償を払ったのだが=M. マンの ‘social caging’。) 社会的組織は歴史を通じてより効率的なものに置き換えられてきた。その到達点が官僚制である。従って国民国家は官僚制の特徴を帯びている。つまり、国民国家は、国民 (nation) に安全・保護・物質的安寧を提供する機能を期待される、近代における社会的組織である。だからこそ国民には国民国家への忠誠心が求められるのである。ただし、国民国家は単一的意思に基づいて合目的的に形成された産物ではない。それゆえ、自動的な忠誠心の確保は期待できず、支配を正当化する根拠が必要とされるのである。

ここで、著者による用語の定義を紹介しておく。

i, nation-state

“...a secularized social organization with a fixed and stable territory and a centralized political authority underpinned by intensive ideological particularism and the promotion of moral egalitarianism, social solidarity and cultural homogeneity among its populace. More specifically, the nation-state rests on the principle...that it has the legitimate right to monopolize the use of violence, taxation, education, and legislation in its territory” (① : 66f.)

「…固定的で安定した領土および、強いイデオロギー的特殊主義と民衆の道徳的平等主義・社会的連帯感・文化的同質性の促進によって支えられた中央集権的政治的権威とを備えた世俗化された社会的組織。より具体的に言えば、国民国家は、…それが、その領土内において暴力の使用・徴税・教育・立法を独占化する正当な権利を持っている、という原理に依拠している。」

ii, nationalism

“an ideology that rests on the popularly shared perceptions and corresponding practices that posit the nation as a principal unit of human solidarity and political legitimacy” (① : 75)

「ネーションを人間的連帯と政治的正当性の主たる単位と考える、民衆によって共有された知覚とそれに対応する実践に依拠するイデオロギー」

iii, ideology

“a relatively universal and complex social process through which human actors articulate their actions and beliefs” (① : 170)

「それを通して行為者がかれらの行為や信念を明確に示す、かなりの程度普遍的で複雑な社会的過程」

iv, nation

評者が見落としたのかもしれないが、著者は特に nation の定義をしていない。上記の定義などから考えると、nation は、その構成員が道徳的に平等であり、社会的連帯感を持ち、文化的に同質であり、総体として国家に正当性を与える人々である。

2, ナショナリズムはそれ自体が暴力的であるわけではない。ナショナリズムを暴力的にするには、国家による強制、イデオロギーの浸透が必要である。さらに言えば、両者にかかわるのだが、小世界での連帯感の国民国家レベルへの取り込みが必要である。

i, 国家による強制 (the cumulative bureaucratization of coercion)

著者が②で援用しているデーヴ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』(邦訳=ちくま学芸文庫 2004)によれば、人間には、人間を殺すのをためらう強い傾向がある。たとえば、第2次世界大戦中、アメリカのライフル銃兵の発砲率は15~20%でしかなかった。しかもそれが敵兵に向けて発砲された証拠はない。したがって、人殺しを強制される戦場を経験すると、人は精神を病むのである。人は本来、人殺しを嫌悪する。そんな人間に人殺しをさせるためには、強い強制力が必要である。敵前逃亡、脱走、徴兵拒否に対する、銃殺刑を含む厳しい懲罰がわかりやすい例であろう。

さらに、官僚制的人格を挙げておくべきだろう。官僚制の人間は、与えられた任務をきちんと果たすことを最高の義務と見なす。たとえそれがホロコーストのような道徳的に許されないことに貢献してしまうとしても、道徳的な責任は上位者にあるとして、自らは自分に与えられた任務を果たそうとするのである。

ii, イデオロギーの浸透 (centrifugal ideologization)

本来人殺しを嫌悪する人間に人殺しをさせるには、外部からの強い強制力に加え、内部からの動機づけ即ち人殺しを納得させる意味付けが必要である。

近代はいわば「神が死んだ」時代なので、絶対的な道徳はない。従って、一面では説得の必要性が歴史上最も高まった時代である。しかし他面ではすべてが許される時代でもある。著者によれば、テクノロジーの発達(マスメディアの普及)、国家組織の発達(義務教育の普及)、経済の発達(安価な新聞)といった構造的条件によって、プロパガンダが効力をもちうる。すべてが許される時代にプロパガンダが成功を収めたとき、例を見ないような大量殺戮が可能となるのである。ちなみにプロパガンダは「大集団の人々の考えや行動に影響を与えるため、理念やイメージの比較的体系的な生産と伝播を含む組織的コミュニケーション」(②:215)と定義される。

iii, 小世界での連帯感の国民国家レベルへの取り込み (incorporation of the pockets of micro-solidarity)

人間は、安全で心地よく、愛され、尊敬され、承認され、自分の行動に幸福と満足を感じるために他の人間を必要とするが、そのような感情は小世界でのみ感じることができる。小集団はその意味で極めて重要な位置を占めているのであって、例えば兵士は、上記から予想されるのとは異なり、ネーションや国民国家のために命を懸けるのではなく、家族や恋人、親しい人を守るために戦場に赴く。そして戦地では、中隊への忠誠心と相互防衛の気持ちから戦闘を行う。兵士は自分の死よりも面目を失うことの方を恐れるようになるのである。

このような「自分の中隊・家族のための、あるいは親友から成る革命もしくはテロリスト細胞のための、深くパーソナルで自発的な犠牲の事例が、ナショナルな大義のための殉

教として解釈され直す」こと (①：117)。あるいは「小集団のミクロレベルでの連帯感を成功裡に(国民国家レベルに)取り込む」こと (①：118)。[これは、国家やマスメディア、社会運動などによる成功裡のイデオロギーの浸透の一側面と言える。従って、新たな項目 2-iii を立てるのではなく 2-ii に含めることが可能かもしれない。ともあれ] 上記 2-i, 2-ii に加えこれができるとき、ナショナリズムは暴力的な相貌をもって現れうるのである。

それでは、暴力的ナショナリズムをどのようにして防ぐことができるのだろうか。論理的には、国家による強制とイデオロギーの浸透を防ぐことができれば、ナショナリズムの暴力化を防ぐことができる。しかしながら、著者は、それらが生起した経緯から判断したのであろう、国家による強制とイデオロギーの浸透を捨て去ることはできないという。それらの廃棄ではなく、対抗する社会組織やイデオロギーによってバランスを取ることを著者は提言する。それは換言すれば、ローカルからグローバルまで多層なレベルで社会組織が存在し、均衡と抑制を取る状態である。簡単な記述にとどまっているが、著者にこれ以上を期待するのは酷である。詳細な制度設計は政治理論家や実務家の任務というべきであらう。